

変化が私の帰還を早め、二十八年十二月、辛うじて懐かしい祖国の地に辿り着くことができた。

軍隊生活、そしてシベリアへ

福井県 林 俊 男

私は大正十三（一九二四）年生まれで、満八十歳になります。今から六十年も前の話でございますので、多少記憶違いもあるうかと思えますが、お許しをいただきたいと思えます。

シベリア抑留の話でございますが、シベリアって言いますと、まず寒いことだけをお思いだろうと思えますが、夏は暑いですね。三〇度から三五度まで上がります。日本とあまり変わりませぬね。シベリアは広いですから色々だと思えます。

暑いけれども、冬はうんと寒いです。マイナス三〇度や四〇度は当たり前ですが、朝晩かなり冷えます。

私は昭和十九（一九四四）年に満二十歳になり現役で兵隊に入りました。戦争末期の昭和十九年十月二十日、敦賀市栗野にある中部三十六部隊（大

体滋賀県と福井県)の兵隊が入ってきました。五日間訓練を受け、十月二十五日の夜中に起こされて「今から外地に出発」ということで防寒用の襦袢、袴下(毛糸のシャツ、モモヒキ)等を支給され、ラシヤの軍衣袴をもらいました。すでにアツツ島で山崎部隊長以下五千人の兵隊が玉砕したから、ああ、こりや北方のどこかの島へ行くんだらうと覚悟を決めていたわけですが、どうも話を聞いてみますと「満州らしい」という話がちらちらと出ました。

雑嚢と帯剣、これまあ並みの兵隊の物でございます。水筒は「竹チャンポ」ですね。竹の筒にお茶を入れます。靴は編上靴の替わりに地下足袋をはいてそのまま出発です。

東本願寺に集合ということで、津師団と京都師団の兵隊とで軍用列車を仕立てて西の方に向かった訳でございます。

博多から乗船という予定だったのですが、制海権といえますか、アメリカの潜水艦がどんどん

内地の近くに来ていて、博多からは乗れない。それなら下関で一泊ということで翌日、関釜連絡線に乗船しました。「港を出るまでは甲板に出るな、いつやられるかわからんから」と言われ、救命胴衣をつけて船倉にジーツと我慢していたわけです。港を離れたらすぐ出てよろしいという事で、内地が見えんようになってから甲板へ出て別れを惜しんだ訳でございます。

釜山に上陸し、ソウル・新義州を経て満州へ入り、ハルピンを通過のときは窓ガラスが凍っており、これは寒いなど感じました。

それからどんどん北の方へ行きました。孫呉を過ぎ、いよいよ我々の任地の環璣駅に到着。駅に着きましたら下士官や兵隊が迎えに来ていたんですが、みんな毛糸の目出し帽(防寒覆面)に略帽、初めて見る軍人の服装にちよつと驚きました。後から聞いたところによると防寒覆面はマイナス一五度までですね。もつと寒くなりますと、それぞれの防寒服装に変わるわけです。マイナス

一五度を超えますと防寒帽が支給されます。これは縁に毛があつて顎を包むようになっていきます。

それからさらに温度が下がり、マイナス三〇度近くになりますと、やつと今度は防寒外套、防寒大手套といひまして、野球のミット位の大きさのものに紐をつけたものを支給されます。それと防寒脚絆といひて、脚絆の上にまたフェルトの内側に毛を付けたものを支給されました。また靴は編上靴の替わりに防寒短靴、これも内側に毛皮を貼つたものです、そのときはあまり実感はありませんでしたが、後で大変な目に遭います。

戦争は、外務大臣の松岡洋右氏がソ連と日ソ不可侵条約を締結していた訳ですね。これはソ連と日本は一切戦争はしないでおこうという条約でございますですね。これをソ連は一方的に破つて攻めてきたんですね。攻めてきたのは八月九日、ちょうど暑いときです。

関東軍司令部の方では、ソ連参戦の予想はもつと後のつもりでいたようです。九月か十月頃で

はないかと思つていたらしいですが、予想より早く来たので面食らつたようです。

新京（長春）にある関東軍司令部は、朝鮮との国境に近い通化というところに司令部を持つていく段取りをしていまして、黒河方面の第二百二十五師団は通化方面へ南下、ソ連との正面には孫呉部隊と環琿部隊で北滿を死守せよとの命令である。

ちようどその頃私達の大隊は二站にて第二線陣地を構築中でしたが、至急環琿陣地に戻れとの命令があり、早速野営地を撤収し行軍にて環琿に向かつた。途中飛行機の飛来があり、友軍機と思ひ手を振れば翼に赤い星のマークがある。慌てて退避したが偵察と見えて攻撃もなく、ほつとした。

陣地に入り破甲爆雷（十キロ木箱入り対戦車用）を本部に受領に行く。いよいよ戦争である。毎日空からの攻撃、五十トン級の重戦車を先頭に重火器の攻撃。加えてアムールよりは、艦砲射撃です。

これが一番恐いですね。ピカッと光り頭の上でドカーンと破裂して大きな破片がヒュルーン、ヒュ

ルーンと落ちてくる。たこつぽに入りじつと我慢です。

我が方は特攻隊が夜襲をかけて戦果を挙げたようですが、圧倒的に優勢なソ連の攻撃は激しくなるばかりです。八月二十一日は朝から砲声も無く静かな朝を迎えた。

停戦条約が結ばれたとのデマが飛んだが、連合軍に対する無条件降伏である。徒溝子で武装解除との命令があり、それぞれ兵器や食糧を持てるだけ持って集合地に向かった。

直ちにソ連兵による武装解除。これよりソ連軍の指揮下に入る。命令により徒歩にて孫呉に向かう。途中野宿をし、翌日孫呉に到着。約一カ月ほど食糧運搬等の使役に従事し、いよいよ作業第十一大隊を編成（シベリア鉄道經由ウラジオストクから東京ダモイを信じ）、ソ連兵の指示に従った。行軍中、隊列を離れると容赦なく射ってくる。

行軍中、戦死体をあちこちで見るとどうすることもできない。一カ月余りの間に白骨化しており、

北満の荒野に屍を曝すのかと哀れを禁じえない。

野営を何泊かして国境の町黒河に到着。江岸にて一泊、フェリーを待つ。

いよいよ満州に別れを告げ、ソ連に上陸。埠頭より野営地に向かう途中、市民がいっぱい見に来ていたが、娘さんが皆素足でいるのが何とも不思議な感じがした。市街を通り郊外の野営地に到着。幕舎に入る。

この野営地には何十張りの天幕があり、満州から来た兵隊は一旦幕舎に入り、出発を待つ。引き込み線があり、満鉄の機関車や貨車その他、満州の物資が手当たり次第に積んである。中には「軍隊の廁カサヤ」と書いた板を打ち付けた戸があつたりした。

毎日毎日満州より入ってくる兵隊は汽車に乗り奥地へと出発していく。何日かして我々にも出発命令が出て、歩いて市内の空き家に入ったが床板もなく窓ガラスもない。時に十月一日、夜の寒さは大変なもので、朝、食器を洗っていると手がく

つつくくらいである。

全員で公園に行き落葉を集めて室内に敷き詰め、八人グループで八枚の毛布を掛け寒さを凌ぐ。

「働かざる者は食うべからず」早速仕事に狩り出される。仕事から帰り環境の整備を行う。

電気はなく、缶に機械油を入れ布の芯を燃やし明かりを取る。翌日鼻の穴や顔は真っ黒であった。もちろん暖房もなく、飲み水は深く小さい井戸一個である、しかも赤痢菌がうようよいる。生水を飲めば即赤痢にかかり、血便を出し死に至る。入浴もなく井戸水を汲んで体を拭く程度である。この井戸で約七、八百人の炊事と洗濯等水一切を賄う。冬ともなれば氷で小さな釣り瓶も入らないようになるので鉄棒で氷を落として使用する。

集団になると便所も大変である。収容所の隅に大きな穴を掘り、歩板を渡し用を足す。二枚の板に何人も並ぶ、それが何列もあり壯観である。

日が段々過ぎ寒くなってくると我慢も限界である。ソ連側と交渉をし、敷地内にある廃屋を燃料

にペーチカに火が入った。

朝が来ると使役の要請がある。発電所、製穀所、製粉所、機械工場等。貨車、船の積み降ろし等、いずれも国営企業である。たまに大工仕事や左官仕事が入ることがある。日本人は手先が器用であるから素人でもロシア人の職人並みである。町にも工場にも男はほとんどいない。日本人が欲しいのである。

仕事を終えて就寝まで休んでいると夜間作業に出てくれという。何分にもソ連は貨車事情が悪いのでこういうことが多々ある。夜はカンテラの元でシラミ退治だ。大きな奴を毎日二、三十匹は捕まえてすつきりする。シラミの媒介による発疹チフスと栄養不足により、昭和二十年冬から二十一年春にかけて大量の死者が出たのである。

毎日死者が出て居室には棺桶が五つも六つも積まれた。たまれば馬車に乗せて墓地に運ぶ。埋葬の穴は交替で掘りに行くが、地面が固くてなかなか掘れない。どうにか埋葬を済ませる。

この頃の食事は朝、えんどう・こうりやん・だ
いず等のスープ。昼は黒パン三〇〇グラム、夜は
雑穀のスープに魚一切れで、朝から夜までお腹を
すかしていた。

毎日誰か入院または死亡で、悲しんでいるひま
もない。

あまりの死者の多さにソ連側も慌てて全員の
健康診断を初めて行い、二種混合の予防接種を行
ったが、十人位は注射針を交換しない。驚きであ
る。

入ソ以来一回も入浴がなく、大変非衛生的なの
で風呂を沸かしてくれた。ニシンの樽に浸かり小
さな桶に一杯のお湯で体を洗う。外はマイナス三
〇度以上。ソ連側はその間に蒸気車で着衣を煮沸。
その煮沸消毒によりシラミは全滅。その夜から安
穏な生活が訪れた。

空き家一軒を燃やし燃料も尽きた頃、住まいの
整備が始まり、室内の石灰塗りや、三段に仕切り
八人位一枱に入って、座って頭がつかえる位だっ

た。四人ずつ交差して寝るわけですが結構暖かい
です。足の臭さも気にしない。

環境も少し良くなり暖かくなると少し要領も良
くなり病人も減ってきたが、相変わらず食糧事情
は良くない。その頃民主化運動が始まり、田中、
西村さん等がリーダーになり教育が始まった。教
材は「日本新聞」を使い、今にも日本は共産党の
世の中になると宣伝した。理想の世の中がくるよ
うに思ったが、あれから六十年、あまり、受け入
れられないようである。

夜仕事が終わりに食堂に集まり民主化運動の教育
を受けた。とにかく分かったふりをしてくれとの
ことであるが、皆それ位の知識はある。ソ連側も
満足気である。

服装は入ソ時のままで、厳寒時は日本陸軍の防
寒外套、防寒短靴が支給されたが、足りない物は
自分で作った。二十二年に入り、アムール州で一
番民主化が進んでいるので帰すと言われ、こんな
に嬉しいことはなかった。ただ、亡き戦友の遺骨

や遺品は持って帰さないと言われ、残念だった。

一週間程シベリア鉄道に乗りナホトカに着いた。

この幕舎で約一カ月、埠頭造りの山からの土運び、夜は共産党の勉強を強制的にさせられ、スターリンに感謝の署名をさせられた。

民主化の足りない部隊は労働収容所へ逆戻り
(民主化グループにより)。

いよいよ日の丸を掲げた明優丸が入港、我々が乗船である。名前を呼ばれタラップに足をかける。

これで初めて安心して日本に帰れる。

抑留記

岐阜県 増倉 勇

日本の敗戦を知ったのは、北朝鮮と中国の国境付近の山中であった。

北朝鮮の羅南において新設師団が編成され、師団の任務が北朝鮮の山中に陣地を構築するためであった。

山に入って陣地構築にかかる前に無条件降伏が知らされたため山を下り、とある朝鮮部落に宿営した。どの位居たか記憶は無い。時節は八月の暑い盛りで付近の川で涼をいやしてはいたものの、この先どうなるのやらさっぱり分からず、場所が北朝鮮でソ連の支配下であって、近くソ連兵による武装解除があるからとて、武器は全部取り上げられ丸裸となった。兵隊が武器を無くした折の心細いことと、さみしい事はない。今まで、日本軍として君臨し、住民も一目も二目も置いていたも